オーライ!ニッポン大賞 審査委員会長賞

日本国際ワークキャンプセンター

東京都 新宿区

概要・講評

ＮＩＣＥで取り組んでいる国際ワークキャンプとは、世界中の若者が２～３週間一緒に暮らし、地域住民とともに、環境・文化保護、福祉、農業などに取り組む国際ボランティアプロジェクトで、現在（2008年11月）会員が1,518名で、プロジェクト数は年間100事業を数えている。国際ワークキャンプの目的は、世界中の若者と地域の住民が、特定の政治、宗教、企業に偏ることなく、①ボランティアパワーで、地域の課題を解決すること、②相互理解、連帯感、多様性を自然に育むことで、平和、公正、豊かな地域社会を育むことであり、誰もが気軽に参加でき、世界中の大勢の人と関わりながら、多彩なアイデアを生かして取り組むことである。

地域の課題解決を目指すプロジェクトでは、地域社会への貢献を第１に考え、過疎・高齢化が進む農山漁村地域において、手入れが行き届かない森林整備、継続が困難になったお祭り運営のサポート、不足した地域自然体験プログラムのスタッフとして参加するなど、地域が抱える課題を解決するため、グローバルネットワークを利用して世界中から参加者が集い、ボランティア活動をする若者を派遣している。

国際ワークキャンプは、基本的に地域住民が主体となって企画・運営され、参加する若者たちの食費・宿泊費などの経費は地域負担ではあるが、実際は食事も自分達で料理をし、宿泊も公共施設を利用するなど経費負担を抑え、地域の実情にあったサイズのプロジェクトを心がけている。

現在は、国内40カ所以上でプロジェクトを実施し、中には10年を超える取り組みもある。2008年は、31ヶ国から245名、日本から263名の若者が参加している。

国際ワークキャンプの取り組みは、18年間にわたり、約２万人の実績をもち、ボランティア活動を行う事によって、地域づくりの一助となる一方で、若者自身の成長にも繋がっている。この活動を通じ、実際に農村に入って地域づくりを精力的に進める若者が出現するなど、活動の効果が現れている点が評価された。

オーライ!ニッポン大賞 審査委員会長賞

大北農業協同組合

長野県 大町市

概要・講評

大北農協は、①「地域と人の活性化」②「第二のふるさとづくり」③「将来の農業のファンづくり」の３つを目指し、地域組合員・行政・ＮＰＯ・諸団体・関係者と一体となって都市農村交流の拡大を図るべく、取り組んでいる。

全国に先駆け、ＪＡが窓口となり、昭和46年7月より都市（消費者）と農村（生産者）とを結ぶ一つの手段として、「都会のこどもにふるさとを！」をコンセプトに、農家民宿を活用した交流事業「夏休み子ども村」（小学生対象）をスタート。翌年から「春休みスキー教室」に発展し、年２回の交流事業を38年続けている。宿泊や各種体験の指導は、ＪＡ組合員が経営する農家民宿が責任をもって対応し、自然体験、農業体験等を通じて、そこに暮らす地域の人々との交流やふれあいを深めている。

また昭和58年には、都市住民の自然回帰志向のニーズにいち早く対応し、また果樹農家の発展に寄与するため、「りんごの木のオーナー制度」を開始。当初は61本のりんごに58世帯であったが、現在では500本の契約数に拡大している。

平成９年からは、日本生活協同組合連合会と連携した生協グリーンライフ（体験交流型の旅）の受け入れを開始。平成15年度からは、東京都武蔵野市のセカンドスクールの受け入れをスタート。滞在期間前後も事前・事後学習に積極的に参加し、教育効果を高め、お互いの交流を深めている。

これらの活動を通じ、ＪＡ組合員（農家）の方々に農業に対して自信をもたせ、生産意欲の向上や、美しく活力に満ちた地域づくりへの意欲を高めていく手段として考え、大北地域のJA組合員の農業経営に自信と元気を回復する契機に繋がる事業展開を行っている。

都市農村交流の先駆けとして38年の実績を持ち、常に来訪者の求めるニーズを的確に掴んで事業展開を行っている。受け入れ体制も、外部のインストラクターに頼らず、地元農家・民宿が全て責任を担う事で、家庭内のコミュニケーションも活発化し、高齢者が元気になって所得向上にも結びついている点が評価された。

オーライ!ニッポン大賞 審査委員会長賞

すさみ町商工会・都市と農山漁村交流事業推進委員会

和歌山県 すさみ町

概要・講評

すさみ町では、姉妹都市である大阪府寝屋川市との交流が盛んで、現在でも年間2,000人を超える人が訪れるなど交流が行われているが、今後さらに交流人口や定住人口の促進を図るため、すさみの素晴らしさを体感できる「海と里の大学」を開校している。

大学では、「基礎講座」、「選択講座」、「修士課程講座」を通じ、釣りの楽しさ、伝統文化の学び、本物の食の安全・安心等を体感して貰うプログラムを構築しており、それを教えるインストラクターは、専業漁業者や一般住民が務め、仕掛けや漁具づくりから、釣り上げて食べるまで、魚に関するノウハウを伝授している。

また学生には、大学専用ホームページやメールマガジンを通じて最新情報を発信し、特に釣り情報は日々の釣果を提供している。「通信講座」の通信教育生の受入も行い、情報交流人口の確保を図っている。

本活動を通じ、海と魚を中心とする体験講座の多彩なメニューと受け入れ態勢の充実を図る事により、釣りマニアだけではない、初心者や都市部ファミリー層の参加も期待でき、遊漁人口の拡大に貢献し、地域漁業者の三次産業化を進める事で、所得向上に繋げていこうと取り組んでいる。

また、インストラクター募集では高齢者やサラリーマンなど多くの応募があり、特に、アオリイカ釣り講座のインストラクター８名による「南紀すさみアオリイカクラブ」が組織され、今後、自主運営を進めていくなど、地域全体で体験事業に対する地域の機運を高めている。

この取り組みを通じて、過疎化が進み、荒廃しつつある農山漁村地域の自然環境保全に対する都市・農山漁村住民間での共通認識の確立を目指している。

商工会が中心となり、交流人口の増加や定住、観光振興に積極的に取り組んでいる。海と里の大学とすることで、一過性の体験で終わるのではなく、何度もすさみ町に足を運ぶ流れを作っている。また地元の釣り名人が講師になるなど、地域住民の活力にも繋がっており、今後の発展に期待が持てる点が評価された。

オーライ!ニッポン大賞 審査委員会長賞

坂本グリーンツーリズム運営委員会

徳島県 勝浦町

概要・講評

旧坂本小学校の廃校を活用して、農村体験宿泊施設「ふれあいの里さかもと」をオープン。その運営を担う地元住民組織として、平成13年に「坂本グリーンツーリズム運営委員会」を結成し、地域住民に愛される施設であるよう、地域の住民と連携して取り組んでいる。

平成14年３月のオープン以来、「出来ることは何でもやってみよう」の精神で、地元のおじさんやおばさんがインストラクターを務める30種類を超える農業・農村体験メニューや、地元の主婦が作る田舎料理などを中心に提供し、多くの客が訪れており、利用者ニーズへの積極的かつスピーディーな対応を心がけ、現在では、施設補修（大規模修繕を除く）を含め運営委員会が負担するなど、独立採算で運営している。

ＮＰＯ法人「阿波勝浦井戸端塾」が主催の約２万体のひな人形を飾るビッグひな祭りと連動して、沿道一帯に、地元の高校が育てた花や人形を飾り付ける「おひな街道」を設置したり、ふれあいの里さかもとに設置される「おひな様の奥座敷」と、運営委員宅に開設する「奥の院」を結ぶ沿道の民家にもひな人形を飾るなど、坂本地区全体を「ひなの町」として盛り上げている。

また、都市部からの人を迎えるようになり、地域住民による道路脇の水田を活用した花作りや、廃農園を山菜園に復活させるなど、美しいむらづくりが活発化。阿波みかん発祥の地であることから、2007年からは「さかもと農楽・みかん組」としてみかん園を復活し、農業講座を実施している。

オープン６周年を迎え、確実に力を付けながら運営されており、厨房スタッフやインストラクターなど新たな雇用機会の創出も生んでいる。「おひな様の奥座敷」や「ぼんぼん飾り」など、命名にも地域の優しさが十分に表れており、地域の様々な体を巻き込みながら、美しいむらづくりにまで発展している点が評価された。

おおせ元気っ子クラブ

茨城県 日立市

概　要

平成13年５月の「おおせ元気っ子体験村」（日立市で初めてとなる７泊８日の通学合宿）の実施をきっかけに、学校でも家庭でもできない体験を地域ぐるみで行おうと、会瀬学区コミュニティ推進会の青少年育成部内に「おおせ元気っ子クラブ」を開設。会瀬小学校の３、４年生を対象に、月１回、年間を通じてさまざまな活動を実施している。『地域住民とふれあいを深め、「子育て、子ども時代」を会瀬に住んでよかったと思う地域づくり』の推進という青少年育成部の重点目標の下、元気っ子クラブでは、①地域の特性を学ぶ、②海を守るためには山の環境を学ぶ、③体験を通して自然の大切さを学ぶ３つの目標を定めて取り組んでいる。

平成16年４月、エコクラブに登録したことをきっかけに、活動テーマを「環境」と定め、平成19年度には、日立市環境教育活動支援事業として「鮎川の水・ひたちの水道水水質検査」（霞ヶ浦環境科学センター見学）、（海岸清掃、漁業見学等）、「ナイト・ZOO・クルーズ」、「レッツレスキュー」（日立市消防署の指導）、「まゆ玉づくり」、「アート・デ・太巻き作り」などを実施。特に７月に実施された「元気っ子体験村」では、台風が接近するなか、４～６年生35名が２泊３日で行い、奥久慈憩いの森で環境アドバイザーの指導のもと、下草刈りを体験した。

平成20年度には、学校の敷地を利用してサツマイモつくりを植え、休み時間に草取り作業を行いながら収穫する農業体験を実施。会瀬漁協の協力による漁船体験・水揚げの現場を見学。また環境学習の一環としてエコキャンドル作りなどを行った。

学区コミュニティ青年育成部の事業であることから、各種団体と連携を図りながら推進している。また子ども達にとっても、「元気っ子体験村」等の経験を通じて、山と海の自然環境との関わりを学ぶことで環境を守るきっかけづくりになり、漁業体験や農業体験を通して、食の安全や物の大切さを学ぶ絶好の機会となっている。

（「コカ・コーラ環境教育賞」（財団法人　コカ・コーラ教育・環境財団）よりご推薦。）

下呂温泉旅館協同組合

げ　ろ　おん　せん　りょ　かん　きょう　どう　くみ　あい

岐阜県　下呂市

概　要

古い歴史と高温、良質な泉質を誇り、「有馬、草津と並ぶ三名泉」として知られる下呂温泉は、昭和40年代に直面した乱開発による源泉の枯渇や温度低下の危機を乗り切り、温泉の安定的な供給を図るため「下呂温泉事業協同組合」を設立し、お湯の集中管理システムを導入。これに加えて、昭和62年には、いち早く飛騨牛のブランド化に取り組み、各温泉が出資しあい、「㈲飛騨下呂温泉牧場」（現在は年間300頭の生産・飼育）を設立するなど、食材の共同仕入れ事業等の努力もあり、平成２年の宿泊客数は年間165万人に増加したが、バブル崩壊等による景気低迷で翌年以降宿泊者数は減少の一途をたどり、平成16年にはピーク時の約2/3まで落ち込んだ。

こうした厳しい状況の中、地域への誘客を促進するため、新たな観光資源の掘り起こし、創造を目的として、旅館協同組合の青年部を中心とした活動がスタート。オリジナリティ溢れる新たな交流イベントとして企画した音楽と花火を融合させた花火大会（下呂温泉花火ミュージカル冬公演）は、平成19年には４日間で合計約５万人を集める大イベントに成長。「健康」と「食」をキーワードにした滞在型観光に向けた取り組みとして始めた、温泉とウォーキングのツアーでは、リュックサックを担いで歩く人が増えるなど、平成17年度以降、宿泊者数が増加に転じている。

観光と異業種との連携も進め、旧下呂地区での粗生産額が２億円の「春夏トマト」では、これまで出荷できずにいた形の悪いものをジュースにして温泉宿の朝食で提供することにより、双方のメリットを生み出すシステムを構築。その後、トマトを使った加工品の開発が積極的に行われるなど、地産地消の取り組みにも繋がってきてる。

また、美人になる温泉の入り方を指導する入浴指導者、お座敷芸を伝授するベテラン温泉芸者、街にあるショーウィンドーを博物館にしてしまおうと企画する行政マン、キノコ博士や自らの作詞作曲で、旅館でライブを行う人々など、ユニークで豊富な人材の存在も大きく、下呂温泉地域の活性化が図られている。

（「優秀観光地づくり賞」（社団法人日本観光協会）よりご推薦。）

オーライ!ニッポン　フレンドシップ賞

特定非営利活動法人　島の風

沖縄県 伊是名村

概　要

伊是名島は沖縄本島の本部半島の北約40Kmにあり、人口約1,700人、周囲約17Kmで、アクセスの不便さから観光客も少なく、沖縄の原風景とも呼べる優良な景観、伝統文化、伝統的コミュニティを色濃く残している。

しかし、零細な農漁業以外の産業もほとんどなく、2004年「伊是名村観光立村宣言」として観光客の誘客を図るもまだその効果は薄いが、大量誘客を行った他離島の取り組みを見ると、環境の破壊やコミュニティ文化の変容等による疲弊感が漂い始めている。

このような現状から、小規模離島による適正規模の観光の仕組みを作る必要があると考え、「島のこしが島おこし」をミッションに、島のエコロジカルな生活スタイルを残し、開発に頼らない持続可能な観光をめざし活動している。さらには、住民が主体的に取り組むコミュニティ・ツーリズムも推進し、従来の商品提供型観光から、運動提案型観光へのシフトチェンジを図り、美しい島をつくり、美しい島であり続けることの運動を提案している。

具体的には、放置されている古民家を改修再生し、街並みや景観を守るとともに、「島暮らしの体験施設」として活用し、周辺のコミュニティが運営することで、新たな収入機会へ繋げるコミュニティ・ビジネスを構築。子ども達に沖縄民家のもつ自然と共生するパッシブデザイン等の学習機会の場にも繋げている。現在２棟を再生し、うち１棟を「島暮らし体験の宿」として運営し、夏季の稼働率は70％を越える。加えて伝統野菜の復興、マイバッグの全島普及運動、100％住民主体による島の宝再発見事業「しまあかり」など様々な運動に広げている。

古民家改修を持続可能な地場産業として育成することも視野に入れ、平成19年度に沖縄古民家再生職人養成カレッジを実施し、30歳から64歳の参加者が古民家再生の技術取得を行うなど、伊是名にある伝統的な景観や文化が、島おこしに有効に機能していくことを目指して取り組んでいる。

(「市民が創る環境のまち“元気大賞」(特定非営利活動法人　持続可能な社会をつくる元気ネット）よりご推薦。)

ライフスタイル賞　講評

ライフスタイル賞は、Ｉ・Ｕターン等により農山漁村に定住し、個性を活かした魅力的な新しいライフスタイルを実践している方々について広くその生き方を紹介し、これから農山漁村に行ってみたい、住んでみたいと思う方への参考としてもらうことを目的としています。

今年度も、ご応募頂きましたそれぞれの方々が、農山漁村地域に愛着を持って溶け込みながら、独自のアイデアと方法で魅力あるライフスタイルを確立されており、選定は難航しましたが、審査委員会では、審査基準（＊）をもとに、様々な角度から審査を行いました。

特に、「明確な目標をもって心身共に豊かな生活を実現していること」、「地域の魅力を最大限にアピールし、そのことで地域の波及効果へ繋がっていると思われること」、「農山漁村地域の環境を楽しみ、その人自身が楽しく生活していること」、「地域に溶け込み、その人がいると地域が明るくなるだろうと思われること」等に着目して選定しました。

結果としては、都会暮らし34年、田舎暮らし33年の経験から、自身の家を「自在屋」と称し、都市住民を対象とした田舎暮らし体験塾を開校する「川井達弘さん（秋田県）」が選ばれました。

また今年度のもっとも特徴的な事として、初めて外国から日本へ移住した事例が入賞しました。日本の手漉き和紙に魅せられ日本へ来日し、和紙の栽培から技術までを習得・実践。檮原和紙の魅力を地域はもとより世界に発信するほか、小学生への手漉き和紙指導を行うなどに取り組んでいるオランダ生まれの「Rogier Uitenboogaart（ロギール・アウテンボーガルト）さん（高知県）」が、日本の伝統を受け継がれている姿は、感動的ですらあります。

また、現在注目されている若い世代が農村地域で活躍する事例として、ドイツの大学で学んだ事をきっかけに、農業・農村の魅力とその可能性を見出し南阿蘇に移住し、農業や畜産に取り組みながら、消費者交流等も実践し、阿蘇の資源であるススキの利活用を考えるＮＰＯの立ち上げなど、生活を楽しみながら、地域づくりも取り組まれる「大津ご夫妻（熊本県）」が選ばれました。

ライフスタイル賞に選ばれた方々の生き方が参考となり、今後、全国各地において二地域居住を実践する方々、農山漁村へ定住する方々、また農山漁村地域でチャレンジしてみたいという若い世代が増えるなど、様々な形の新しいライフスタイルが生まれることで、より一層、都市と農山漁村の共生・対流が推進されることを期待しています。

今回、入賞はならなかったものの、農山漁村に移住・定住して活躍される皆さまにおかれましては、その魅力あるライフスタイルの実現までのご努力に、深く敬意を表しますと共に、ますますのご活躍を祈念しております。またのご応募、お待ちいたしております。

平成21年３月11日
オーライ！ニッポン大賞審査委員会
委員長　　川勝　平太
（静岡文化芸術大学　学長）

（＊）ライフスタイル賞　審査基準

- 独自性（農山漁村を舞台にした新たなライフスタイルをすごしていること）
- モデル性（他の人の参考・手本となるモデル的要素があること）
- 魅力性（個性的で魅力やバイタリティのあるライフスタイルであること）
- 継続性（無理なく長期的に続けられるライフスタイルであること）